

論壇

## 農業の現場と向き合う

福島大学食農学類教授・食農学類長  
日本農学アカデミー会長  
生源寺眞一

### 特色ある農学教育を目指して

このところ若かりし頃の仕事の現場を思い起こすことが多くなった。古希を迎えたことで過ぎ去った日々を懐かしんでいるというわけではない。いや、その要素も働いているに違いないが、勤務先の福島大学食農学類で若い学生の活動に接するなかで、みずからの体験が呼び起されるとの実感がある。2019年4月に開設された食農学類は、まもなく最初の卒業生を社会に送り出すことになるが、そんな若者たちの姿と40年以上前の自身の姿を重ね合わせているわけである。

食農学類は1学年の学生定員が100名、専任教員が38名だから、農学系の学部としてはもっとも小さなグループに属している。むろん、現代の農学の分野をすべてカバーすることはできない。領域をある程度絞り込むことになったが、同時にそうであればなおのこと、特色のある農学教育を目指す必要がある。こんな姿勢が教員のあいだで共有されている。どんな特色かについて手短かに紹介してみたいが、まずは領域の構成そのものが特色の一面になっていると言ってよい。具体的には4つの専門コースが、フードチェーンすなわち食の流れを明瞭に意識して設けられている。上流には森林や農地・水などを対象とする生産環境学コース、中流には農場の多彩な生産活動を支える農業生産学コース、下流には素材を加工して消費者につなぐ食品科学コースが設置されている。さらに社会科学系の農業経営学コースがセットされているが、農産物の流通や食品のマーケティングなど、フードチェーン全体を視野に収めている。

### 人材育成の基本理念

食農学類の教育理念はディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）として定められており、ここにも特色が反映されている。具体的には「実践性」「学際性」「国際性」「貢献性」の4つの観点を掲げているが、今回は学類教育の基本スタンスとして強調している実践性と学際性の部分を引用しておく。

〈実践性〉本来の農学は課題解決への貢献を第一義とする学問として発展してきた。このような特性を有する農学から学んだ専門的な知識・技能の価値について、関連産業や地域社会の具体的な取り組みとの関わりにおいて認識できること。

〈学際性〉自然資源に依存する衣食住の供給システムは地域環境・農林業・製造業・流通業等の連鎖として機能している。連鎖の各領域に専門化した農学を学びながらも、領域を超えた学際的な理解力と発信力を培うことで、連鎖総体のレベルアップを常に意識できること。

実践性と学際性の概念にはいずれも幅広い応用範囲があると言ってもよいが、学際性については産業の川上から川下までの連鎖を念頭に置くことで範囲が限定されている。先ほど触れたフードチェーンに沿った専門コースの設定を前提としていることによる。川上・川中・川下の領域をつなぐかたちで、学際的な理解や交流の促進を図ろうというわけである。また、実践性の文章はやや一般的な記述だと言えなくもないが、東日本大震災と福島第一原発事故からの復興・再生に取り組む地域の学部であることから、関連産業や地域社会とのつながりの観点から学類教育の特色を強調している。

### 象徴的な授業科目

4つのディプロマ・ポリシーを設けているわけだが、それぞれが特定の科目に限定的に結びついているわけではない。むしろ濃淡はあるものの、カリキュラム全体によって4つの理念に基づく人材養成に取り組むことになる。けれども、学類の特色を象徴するカリキュラムが存在することも事実である。ふたつの科目を紹介しておく。

ひとつは農場基礎実習であり、1年次の前期・後期に配置されている。動植物に直接触れる機会を入学直後から提供することで、具体的な課題に取り組む農学への高い意欲を醸成することが狙いである。農場実習としているが、森林や食品をめぐる基礎的な学習もカバーしている。もうひとつの象徴的な科目として、2年次後期と3年次に開講される農学実践型教育がある。こちらは地域が抱える課題の理解から解決策の提案に至るまで、現場との密接な交流による学びの機会を提供している。自治体や農林業団体などとの連携のもとで、県内7つの市町村がフィールドである。必修科目であり、教員も全員が参加している。学生は2年次後期から専門コースに配属されるが、農学実践型教育の7つの班は学生・教員ともにコース横断型で構成されている。これは学際的なコミュニケーションを意識してのことである。

こうした実践型・学際型の授業に取り組む学生の活動に触れることで、冒頭に述べたように、自分自身の体験を思い起こすことにつながっている。若かりし頃、つまり研究者として歩み始めた時期の体験なのであるが、この点については2023年4月に修士課程がスタートすることも関係している。これも冒頭に述べたとおり、まもなく最初の卒業生を送り出すのだが、その4分の1が新設される修士課程に進学する。つまり、学部生としての学びの日々から、研究にも取り組む日々へと移行する。まさに研究の歩みを始めた自身の体験と重なるわけである。

### 農業試験場を志願

国家公務員試験に合格後のことだが、当時は最終面接とは別に先輩の幹部職員と面談する機会があった。そこでは研究職を希望するとお伝えしたことを記憶している。また、農業経済関連の

研究職の空きポスト情報も念頭におきながら、「地方農試に勤務したい」と申し上げたところ、「君、地方農試ではないよ。地域農試。」と修正されたことも覚えている。明確な研究テーマがあったわけではない。高校までを名古屋で過ごし、大学は東京だったことから、何よりも農業の現場に近い勤務地を希望したのである。思いは実現して、1976年4月から埼玉県鴻巣市に本部のあった農事試験場に勤めることになった。そして1981年8月には札幌羊ヶ丘の北海道農業試験場に移って、道内の農業とともに5年と11か月を過ごした。

鴻巣では学部卒の新米研究員として、先輩研究員からの指導によって何から何までお世話になった。研究や日常生活のイロハを学んだわけである。そのうえで、ふたつの試験場勤務の時代は農家の聞き取り調査に多くの時間を注ぎ込んだ。農業経営の品目ごとの出荷状況や技術的な課題など、長時間にわたる面談も珍しくなかった。北海道ではヒアリングの中心は専業農家だったが、関東・東山・東海が所掌地域だった農事試験場では、兼業農家を対象とする聞き取りを実施したことも記憶している。世帯主が勤務先から帰宅した夜間に訪問するかたちである。農作業時間の確保の工夫や集落の共同行動への関与など、かなり幅のあるヒアリングを行った。

農業の現場との接点という意味では、農作業の実習を体験したことも、その後の調査研究に少なからぬ影響を与えている。鴻巣時代には、埼玉県熊谷市の生産組織で1週間にわたり、泊まりがけで田植に従事した。歩行型の田植機での作業は、慣れるにつれて爽快感を味わうことにもなった。対照的なのは、ハウスから苗箱を運び出して軽トラックに積み込む作業であり、何十回と繰り返すことのつらさを覚えている。補助作業のほうが重い負担であることを学んだわけである。

札幌時代には酪農の作業を体験した。8月に道東の中標津町の酪農家に20日間滞在し、牧草の梱包・運搬作業に従事するとともに、朝夕の搾乳や厩肥の移動といった仕事も手伝うかたちだった。搾乳牛が百頭近くで、当時としては大規模な酪農経営であった。とくに多忙な牧草収穫期にはアルバイトの学生も雇われており、作業の分業体制をうまく稼働させるところにポイントがあると感じられた。個人的には、自身の牛の個体識別能力がお粗末であることを思い知らされた体験でもあった。

## 学際的な交流

農業試験場勤務の時期には、経常研究すなわち個人での研究に加えて、グループによる研究プロジェクトに関わる機会も与えられた。典型的には別枠研究であり、特定の目的を設定したうえで、異なる領域の研究者が分担・協力する方式である。研究自体が学際的であると言ってよいのだが、新米の研究者である私にとっては、農業経済学とは違う分野の先輩研究者との出会いの場としての思い出が深く残っている。

鴻巣時代に農業用水の利用実態を1334枚の水田について調べたことがある。田植のさいに数分間の聞き取りを行うかたちである。別枠研究の一環としての現地調査であり、2週間にわたって延べ100人の研究者が集落の集会場に宿泊して対応した。寝具や風呂桶を持ち込んだ自炊態勢であった。農事試験場の研究者だけでなく、当時の農業技術研究所から農業経営分野以外の研究者も参加していた。なかでも印象的だったのが、環境保全型農業研究の先駆者である宇田川武俊氏

と交わした朝晩の雑談である。環境をめぐる専門領域の意欲を強く感じ取ることになった。

札幌時代にも調査のプロジェクトに参加した経験がある。北海道農業試験場に着任する前後のことだが、石狩川流域を中心に記録的な集中豪雨があった。まもなく水田転作下の作物の被害や内水排除による被害の拡大などについて、北海道庁のリードで実態調査が開始された。北海道農業試験場からは作物栽培の研究者などが参加し、農業水利に多少の経験があった私もメンバーに加わった。まさに特定の課題に向き合う学際的なチームであった。なかでも北海道大学の農学部から、梅田安治教授の土地改良学研究室が中心的な役割を担われたと記憶している。農事試験場時代に培われた農業農村工学の領域とのつながりは、札幌時代に一段と深まることになった。

### むすびに代えて

自身の若かりし頃の経験のなかから、思いつくままに現場と向き合った事例をピックアップさせていただいた。ほとんど触れることのなかった研究との関わりについても、多少の補足を付け加えておくことにしたい。農業試験場の時代には自身で、もしくはチームで収集した一次データを用いながら、主として数量分析的な方法で検証作業を行うタイプの論文を公表していた。一次データには農家の聞き取りで得られたものもあり、過去の農地の売買歴など、農家の行動に関する記録によるものも含まれている。つまり、農業・農村の現場に接することが、検証作業に必要な情報を確保することにつながっていたわけである。それだけではない。検証作業を組み立てるさいの仮説自体が、農家からの聞き取りがヒントとなって生まれたケースも存在する。研究書の冒頭に示唆をいただいた農家の発言を記述したこともある。

40年を超える研究歴の後半には、農業政策に関連した論考を公表する頻度が高くなった。すなわちミクロ経済学のフレームワークのもとで、EUや国内の政策を分析するかたちである。それが生源寺の専門分野だと受け取られている面があるかもしれない。また、政策の研究は現場体験とは距離があると言えなくもない。けれども、農業試験場時代の農業・農村との交流は、研究歴後半の農政論のベースとなる認識にも反映されている。ひとつは農家が合理的に判断する存在だとする認識である。兼業農家も含めてである。と言うよりも、都府県において兼業農家として農業を継続した行動は、経済成長への合理的な適応形態であり、合理的な判断の典型例だったのである。もうひとつ、日本の農業とくに水田農業が二層の構造のもとにあるとの認識である。すなわち、所得確保のビジネスの上層とともに、地域のコミュニティの共同行動に支えられる基層が存在するのである。このうち基層には長期の時間視野という点で、農村らしい持ち味もある。このあたりを明示的に考慮することが、現代の農業政策論にも欠かせない。

日本農学アカデミーの新会長として、いささか異例の論壇となりましたが、あまり知られていない履歴の一端をお伝えすることで、自己紹介に代えさせていただきました。